

【中学校の部】 最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

我が家のルール

大分市立竹中中学校 3年

甲斐 潤樹



「今日から潤樹にも仕事があるよ。ゴミ出しは潤樹の仕事だよ。」
小学校に入学した時に父が言いました。僕の家ではゴミ出しと風呂掃除は子供の仕事です。
その時は、仕事という言葉が大人になったみたいで、僕は毎日張り切ってゴミ出しをしました。仕事をしたら兄達のように小遣いがもらえるようになったので、それも嬉しかったです。
3年生になったら、
「今日から潤樹は風呂掃除の仕事もしていいよ。やり方はお兄ちゃん達に聞いて。」
と言われました。風呂掃除の仲間入りをすると小遣いが更にアップするので、この時も嬉しくてやる気が出ました。
けれど、だんだん仕事をするのが嫌になってきました。
それは、風呂掃除は定期的に排水溝の掃除をするからです。しかも、それは当番制ではなく、気付いた人がすると決まっていた。
誰もしなくて水の流れが悪くなると母が、
「排水溝が汚いよ。誰か掃除お願い。」と言います。僕たち兄弟は、
「今回は俺がするから、次はお前がしろよ。」
「代わりにごみ捨て今週は俺がするよ。」
と、話し合いをします。僕は一番下なので兄たちに言われたら、嫌な排水溝掃除もしました。仕事が雑だと、兄達からいねいにするように注意されることもありました。
周りの友達を見ても、仕事なんかしなくても小遣いをもらっている人はたくさんいるし、僕はなんだか損をしている気がして、母に聞いてみました。
「なんでうちは仕事があるの？ほかの家はそんなの無いよ。」
「うちは働かないとお金はあげないとパパが決めたから。でもいつか、なぜかわかると思うよ。潤樹が仕事をやめるのは自由。でもやめればお小遣いはもらえないし、お兄ちゃんたちの仕事は増えるよ。」
と、母は答えました。
母が言った「いつかわかる」という言葉の意味は中学3年生になった今年わかりました。
今年の春、2番目の兄も家を出て、家にいる子どもは僕一人になりました。僕は春からひとりで仕事をしなければならなくなりました。
けれど今では仕事をするのは当たり前になっているので、仕事量が増えたことに不満もなく毎日きちんとしていました。
そんな時に兄が帰省しました。
「潤樹、仕事いつも1人で大変やろ？お兄ちゃんがいる時にはするからいいよ。」
と、兄が言ってくれました。
僕は大変と思っていなかったけれど、兄の言葉がとても嬉しく感じました。
その時に、はっとしました。
当番制ではなく、気付いた人がするルールにしていたことや、母が一度も「しなさい」とは言わなかったこと。それは母が、仕事は人からやらされてするのではなく、周りを見て相手の気持ちを考えて自分から動くものだと思っていたからなのではないかと思いました。
母の帰りが遅かったら、兄が洗濯物を入れてたたんでいたのも、母から
「遅くなるよ」
と、電話がかかると、兄が
「何かやっつくことある？」
と、聞いていたのも、全部僕の家の仕事ルールの延長線上にある行動だと気づきました。
嫌だなと思うことも毎日続けていけば当たり前になること、相手の立場に立って少し優しい気持ちを持つこと、人はお互いに支え合いフォローしあって生活していること、僕は我が家の仕事ルールを通して多くのことを学んでいると思います。
これからも家族の一員としてしっかり仕事をしようと思います。そして、相手の気持ちまで考えることができるような人になりたいです。